

Y3-08

パキスタン洪水被害救援活動

高山赤十字病院 内科

白子 順子、柵橋 忍、白子 隆志

パキスタンでは季節風による影響で、平成22年7月下旬から記録的な大雨が降り続いたことにより、インダス川が増水し大規模な洪水が発生した。この洪水による死亡者数は約2,000人、被災家屋190万棟、被災者数2,000万人で、洪水としては世界で過去に類をみないといわれるほどの被害となった。演者はフランス赤・日赤の基礎保健ERUチームの第2班の要員として派遣された。我々ERUチームは、洪水被害が発生し1ヶ月が過ぎているが支援がまだ届いていなかった南部のシンド州で活動した。活動の柱としては、2か所での巡回診療とその拠点となる病院においての母子保健活動のサポートであった。巡回診療のサイトは第1班によるアセスメントを参考に決定した。そのひとつのMehtar地域では、10月5日～23日までの診療期間では1日平均患者数は140名で、全患者数は2,372名、男女はほぼ同数（男性1173、女性1197名）で、5歳以下は全体の16.2%であった。主な疾患は上気道感染、肺炎、皮膚疾患、下痢、発熱、その他感染（目、耳感染症など）で、特に5歳以下では肺炎を含めた気道感染症や下痢が比較的多かった。洪水では被災地域は広範で、巡回診療では移動距離が長いこと、アクセスできない地域もあることが問題となった。また洪水被害では地震被害救援などと違って外傷の患者は少ないことがその特徴で、慢性疾患の割合も多く急性期対応の薬剤での対応が困難であった。

Y3-09

2000年有珠山噴火10年後の影響意識調査 - 伊達赤十字病院での患者アンケート -

伊達赤十字病院 / 室蘭工業大学環境科学防災研究

センター
前田 潤

【目的】災害ストレスは一般に、危機的ストレス、避難ストレス、生活再建ストレスの3つに分けられる。本研究は、死傷者がでなかった2000年の有珠山噴火のような避難ストレス、生活再建ストレスが主なストレスとなった災害が、人々に与える長期的影響について検討する。

【方法】有珠山噴火10年目に当たる2010年3月から4月にかけて、総合病院伊達赤十字病院で1224名を調査対象とした災害影響意識調査を聞き取りにて実施した。

【結果】有効回答者数は、全科通院患者の779名であった。その結果、現疾患と2000年有珠山噴火とが直接或いは間接的に関係があると回答したのは全科通院患者数のうちの17名の3.1%であったが、避難経験者は7.2%、被害経験者は10.8%と割合が増え、避難も被害もあった場合には、15.7%、さらに住宅が全半壊した患者に至っては35.7%までにその割合が増えた。また、全科通院患者で被害があった人はなかった人の8.5倍現疾患との関連を感じており、避難生活があった人はなかった人に比べて5.8倍現疾患との関連を感じており、いずれも有意差が認められた。精神神経科の通院患者では、避難経験者は20.8%、被害経験者は29.4%、被害と避難経験者では41.7%が関連を感じている。この現疾患は、うつ、不眠、腰痛、その他であった。全科で現疾患と関連を感じているのは29.4%であった。

【考察】死傷者はいなかったが、有珠山噴火でも火山性地震や、降灰被害、家屋被害があり、避難生活も半年ほど強いられたり、仮設住宅への転居も余儀なくされた。被害と避難ストレスのあった被災者は、10年後に有意に現疾患との関連を感じていた。それは全科的傾向であった。

【まとめ】災害支援では、家屋被害や、生活ストレス、生活再建ストレスに対応することが重要である。